

## 日本消化器外科学会雑誌編集後記

今年は、平年より 10 日、昨年より 15 日も早く 3 月 16 日に桜の開花宣言がありました。東京の桜の開花宣言は靖国神社境内の能舞台脇にあるソメイヨシノを標準木として決めるということです。日本消化器外科学会の最初の事務所は靖国神社のすぐ近くにありました。当時 3 月の編集委員会は、花見見物の喧騒の中、いつもながら熱く議論がかわされていたことだろうと思います。学会事務所は千代田区九段より中央区茅場町を経て現在の中央区新富町の瀟洒なビルの 5 階に移転いたしました。その会議室で毎月会誌編集委員会は行われています。論文の投稿および査読はすべてオンライン上で行われていますが、会誌編集委員会は昨年 10 月より渡邊昌彦担当理事、桑野博行委員長をはじめとして同一論文を査読する 2 人の査読者のうちどちらかが必ず出席して総勢 14、5 名で 2~3 時間議論されます。インターネットの発達した今日でも会誌編集の最もコアな部分は会議の形式を残しているところは本学会誌が和文誌の最高峰を維持する所以であります。

最近の傾向として原著論文は英文での投稿がふえたためか、原著論文が減り、症例報告がほとんどをしめております。1 か月に査読者に送られる論文数は 6~8 編ほどで、昔の編集後記を参考にすると減少傾向にあります。毎月 6~8 編の査読も決して容易なことではありませんが、編集委員長の桑野先生はその日に検討されるすべての論文に目を通しておられ、評価が割れたときなどは絶妙なコメントを頂く場面が多くいつもながら感服しております。

最近、編集委員会で話題に上った内容でこれから論文を書こうとする人たちに参考になることがあるので紹介します。それは、症例報告は何例目まで報告する価値があるかということです。一説によると 50 例まで報告の価値があるとの意見もありますが、桑野委員長をはじめとする編集委員会の意見は症例報告の希少性は参考文献として引用できる程度までとすべきであるということです。雑誌に掲載されている疾患と同じことを経験したので同様のことを報告するのでは希少性があるとはいえません。ただし、たとえこれまで 50 例以上報告されている疾患・病態であってもこれまでの報告とは違った何か新しい主張点がある場合は掲載する価値が大いに有るということです。症例報告を執筆する際の参考なればとおもいます。

(大坪 毅人)

2013 年 4 月 1 日